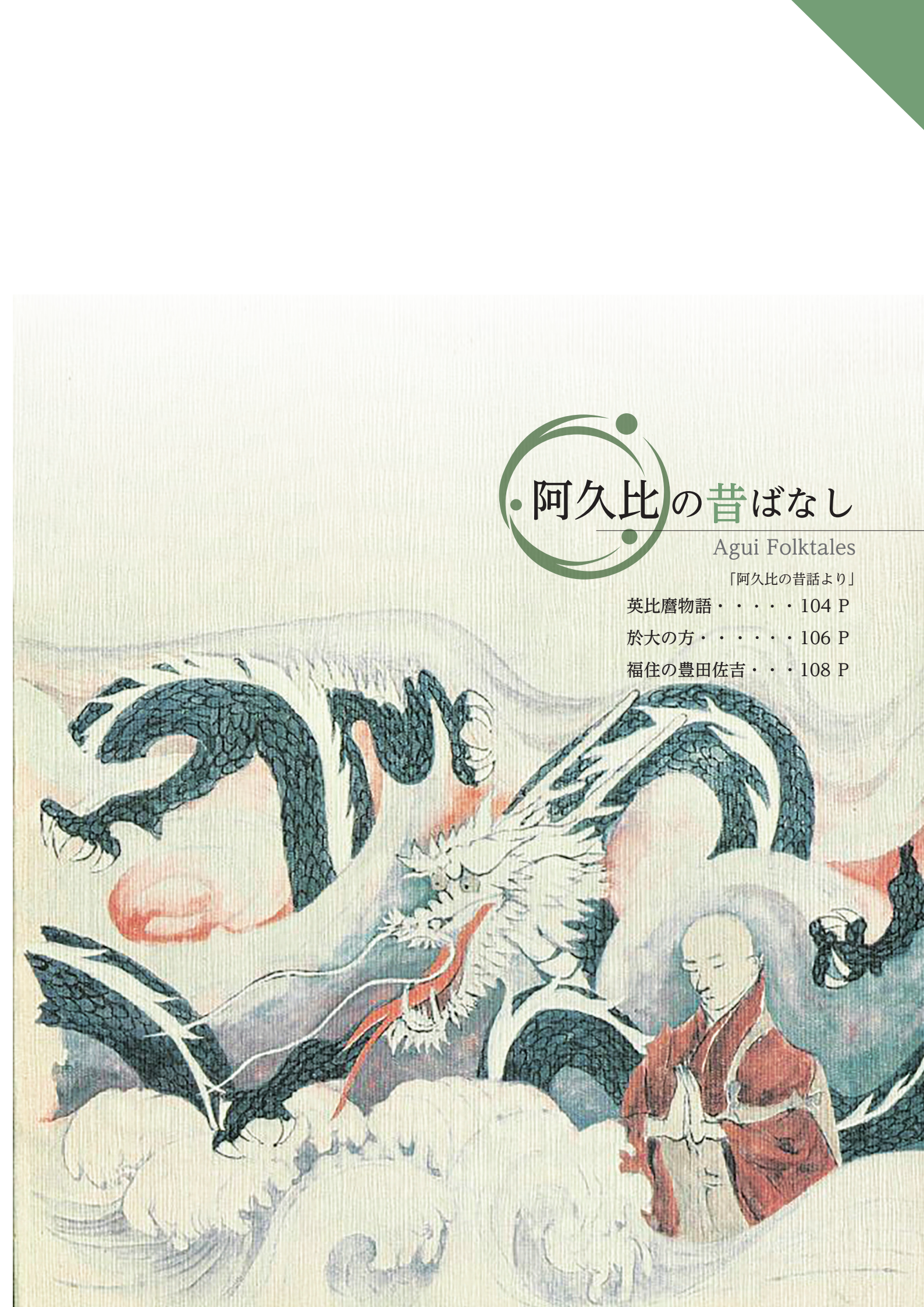




・阿久比の昔ばなし

Agui Folktales

「阿久比の昔話より」

英比磨物語・・・・・・・・104 P

於大の方・・・・・・・・106 P

福住の豊田佐吉・・・・108 P

阿久比の昔ばなし① — 英比磨物語 —

呱呱の声

延長2年（今から約1150年ほど前）の春先のことでした。

深く入り込んだ阿久比谷の海辺には、さざ波が静かに寄せ、輝く太陽が岬の丘から高く昇りかかったころ、銀波の中を、この地では珍しい白帆を高く掲げた一そうの船が、しずしずと入ってくるのが見えました。

「おい、大きな船が入ってくるぞー。」

ちょうど磯へ出て藻を拾っていた里人の呼び声で、次第に人々が波打ちぎわに集まり出し、だれが知らせたのか、里長までが、小者を連れて顔をのぞかせたところ、数人の人影がはしけに揺られて白砂の岸に寄り着き、伴人を従えた都風の貴公子が静かに人々のかたまりへ歩みを進めていました。

「磨は菅原道真の直系の者である。延喜の初め、帝に重く用いられていた父道真公は、藤原一族の謀略で太宰府の閑職に流され、そこで没せられた。われらも、そのことに座して尾張に幽閉せられてあったが、都には天変地異が相続き、これは亡き父君の御霊のたたりには違いないとの世評で、帝も、元の官位に復されて北野に神と祀られた。われらにも、早々都へ立ち戻るようお召しがあったが、長い間幽れの身であった磨は、藤原氏専横の宮仕えはうとましく、心温まる地にとどまって、静かに憩いたいと考えた。」

国の守の話によれば、この里は、知多の郡の中ほど、入江は深く穏やかで、清らかな大河あり、物成り豊かで、里人の心も素直と聞いた。よって、特に帝に乞い、里を中心とする英比荘を賜うことの勅許を得たゆえ、ただ今、まかり越した。どうか、よろしく頼み入る。」

たとえ一時は流されてこられたお方とは言え、身分の高い都人から、思いがけないいねいな言葉をかけられて、里長をはじめ、里人一同、感激して、地に深くひれ伏すのでした。

そして、またたく間に、二年の歳月が過ぎ去っていました。

「おおい、聞いたかや。里長さまのお屋敷で、珠のようなお子がお生まれなさったそうなの。」

「おお、そのことよ。お館さまはたいへんお喜びだし、初めてお祖父さまとなられた里長さまは、笑いで口が閉まらぬ有様だとか……。」

「なんでも、お館さまは、里長さまが丸氏の直系ゆえ、荘の名と合わせて「英比磨」さまと幼名をつけられたと聞いた。」

「のう、お館さまは、すっかりこの地になじまれ、わたしの困りごとや訴えを、だれもが納得するよう裁いてくださるし、読み書きまで、教えてくださる。お子が生まれたことだし、長くにとどまってくださるとよいがのう……。」



えびの子

阿久比の里は、入江へ寄せる細波や、取り巻く丸い丘のたたずまいのように、いつも穏やかで、笑顔に満ちており、その中で英比磨は、お館や祖父の里長をはじめ、人々の慈愛を一身に受けて、愛くるしく、丸々と育ってゆきました。

英比磨が五歳の春を迎えた時のことです。

都から勅使が下向される旨の知らせが届きました。国の守からの時ならぬ早馬の知らせに、里人たちはうろたえ、出迎えやら供応の支度などで走り回るようになりました。が、お館だけは、下向の真意を察しているらしく、今までのように気軽に見回りに出ることもなく、ひきしまった顔で、家に閉じこもりがちになりました。

旅の日焼けで、一層突がり気味の顔となった勅使は、いかにも都の権威を一身に背負ってきたような気負いを見せて上座へ通ると、田舎の建物のしつらえを軽べつするかのよう、じろじろと見回したり、貧相なあごひげをしごいたりしていました。

父に伴われた英比磨は、勅使の前に進んで、深く腰をかがめて一礼しました。しかし、その愛くるしい動作も、勅使に一層さげすみの感情を増させたらしく、童子の顔をのぞき込み、問いかけるように口ずさみました。

「をさな心にかがみこそすれ」

ところが英比磨は、即座に、よく通る声で、その上の句をつけたのです。

「英比の子は生まるより親に似て」

勅使の顔に、アッというろばいが流れ、そして、それは、次第に感動の色に変わってきました。

「良いお子をお持ちなされた。さすが菅家のお血筋じゃ。」

「いや、まだ幼ござる。何とぞ、ご無礼はお許しを……。」

「なんの、磨は、心をいたく動かされ申した。この郡は、智恵多しと書く。このお子は、まことにこの郡にふさわしい。帝はよい土産ができた。」

英比磨が退出したあと、すみやかに都へ帰り、内裏に出仕せよ、違背はならぬと勅命が伝えられ、里長の厚いもてなしと数多くの贈物を受けて、勅使は帰って行きました。



蟹田川

都に召し出された父からは、度々上京の催促がありましたが、里人の願いで、英比磨はこの里から離れませんでした。都の父も、行く行くはこの荘を治めさせようと考えられたか、書籍を送り続けられました。

「英比磨さまあ、また勉強ですの。」

「ああ、阿古女か。今、父上からいただいた漢詩集を読んでいるところなのだよ。ところで、里長の家には大勢の人が集まっているようだね。」

「ええ、蟹田川の堤がくずれて、ご先祖さまの二子塚が傷みそうだと、手だてを相談しているらしいのよ。」

「あ、これはこれは、英比麿さま。お聞き及びのとおりでございますが、なんぞ、よい手だてではないのでしょうか。」
「この間読んだ本の中に、『東に流水あるを青竜、西に大道あるを白虎、南にくぼ地あるを朱雀、北に丘陵あるを玄武、これ吉相なり。』と書いてあった。これに従って、いま北を流れている蟹田川を、塚の東を流れるように変えたらよい。」

人々は、英比麿の学識の深さに驚嘆しました。

さて、青年期を迎えた英比麿は、いとこの阿古女と愛し合うようになりました。そして二人の恋が里人たちのうわさに上がり出したころには、二人は結婚の約束をしていました。

英比麿は、里長の許しを得て、入江の対岸に新しい館を造ってもらい、新妻阿古女の方と移り住みました。甘い二人だけの日々が続きます……。

阿久比の里に、また春が帰ってきました。ところがこのごろ、英比麿が無口になり、妻の問いかけにも言葉を濁すようになりました。何か、重大のことで、思いなやんでいるに違いない。阿古女は独り胸を痛ませました。

そして、ある日、阿古女は、夫の文箱から、都の父君の便りを盗み読みして、真っ青になりました。それには、必ず都へ出てくると、一族の姫君をめあわせたい考えであることなどが書かれていたのです。……。

阿古女の方は、目の前が真っ暗になる思いでした。すでにお腹の中には、英比麿の子が宿っていました。……しかし、自分は、里長の一族とは言え、都の父君の許しを受けぬ身、阿古女はさめざめと泣き続けました。

英比の白袴

英比麿の館に、都から奥方が下ってこられました。菅原氏一族の出で、都育ちで上品な美しいお方でした。阿古女の方が去ってしまった館の中も、ようやく明るさを取り戻してきたようです。

英比麿が都からこの里に帰ってみると、阿古女の姿がなく、代わって、みどり子を抱いて現れた里長夫婦が、阿古女が、英比麿の将来のため、泣く泣く身を引いたことを告げました。英比麿は、あらゆる手だてを使って必死に捜しましたが、妻の姿は、どこにもありませんでした。うわさでは、緑の黒髪を断って、一人西へ去っていったということでした。

英比麿は、母を失ったわが子をいとおしみました。そして、美しい入江にちなんで、新海丸と名づけ、里長に、大切に育ててくれるよう、幾度も幾度も頼みました。

結局、英比麿は、都の父の言うとおり、奥方を迎えることにしました。そして、その翌年には、奥方は玉のような男の子を生みました。英比麿は、丘の青松にちなんで、この子には久松丸と名まえをつけ、共に分け隔てなくかわいがりました。奥方も心優しい人がらでした。

落ち着いた英比麿は、里人を指図して村づくりに励みました。まず、山を削り、浅瀬を埋め、川堤を固めて、田畑をふやし、いくつかの里を造らせました。そして、里々をくまなく回り、人々の訴えをよく聞き、穀物の増産と税の軽減をはかりました。それで、里人たちは、かれを慈父のように慕い、毎年、年の初めには、全員が白い袴を着けて、館へ年賀に上がることを常としました。白い袴は、里人の清らかな敬いの心を表したものでした。都では、この地のおいしいお米とともに、「英比の白袴」は、有名になりました。

こうして、英比麿の徳は、この谷はもちろんのこと、近隣にまでに及び、谷の各里には枝郷ができて、のちの十六か村のもとができましたし、今の東浦町や半田市が、英比荘として開拓されてゆき、英比麿は、その始祖と仰がれました。



回り地頭

英比麿が仁政を施すようになってから、数十年の月日が過ぎ去りました。

年老いた英比麿は、新海丸と久松丸をはじめ荘内の里長たちを集めて、隠居することを告げました。

「私は、すでに年老いたので、退くことにした。今後は、新海丸はこの谷の南半分を、久松丸は北半分を治めなさい。兩人とも、力を合わせて、里人の幸せのために尽くしてほしい。時の移り変わりによっては、この荘にも度々危機が訪れるやもしれぬが、あらゆる手だてを講じて、菅家の血統を絶やすな。」

英比麿が初めて荘内を巡視したとき、入江に大河が注ぐ河口付近は、広い沢地になっていました。そこには、丈の高い片葉の葦が一面に生い繁り、かれの来訪を歓迎するかのように、数百羽の白鷺が群れ遊んでおりました。かれは、その美しい景色に見とれて、長い間たたずんでいました。この地を「白沢」と名づけよう、ここを開拓したら、きっとすばらしい美田となるに違いないと考えました。

英比麿は白沢がたいへん気に入りました。そこで美田を見下ろす丘の八十間四方を神域と定め、ここに、祖先の菅原道真公を祀る北原天神社を造営しました。そして、入江を挟む東西の各里から、社に通じる天神街道を造って、人々に参詣をすすめ、自らも、毎月25日の参拝を欠かしませんでした……。

英比麿の隠居屋敷は、この社の傍らに建てられました。かれは、老妻とともに、毎日のお参りと里人たちとの談笑を何よりの楽しみとして過ごしました。時には、緑の深い丘に腰を降ろして、付近の子供たちの遊びたわむれるのを目を細めて眺めやったり、興がおもむけば、その子供たちを集めて、読み書きを教えたりもしました。功なりとげた後の、穏やかな日々が続きました。

さて、この荘の開祖と仰がれた英比麿は、天寿を全うして、永い眠りにつきました。里の人々は、慈父を失ったように長い間悲しみにくれておりましたが、英比麿夫妻の木像を造って、最近まで、各家へ一日ずつお迎えし、立白の上に新しいこもを敷いてその上に安置し、親族縁者を招いてお参りをいたしました。これは、英比麿はいつまでも生きておられて領内を巡視してくださるのだという思いで、その徳をたたえてきたもので、この地では、「回り地頭」とか「回り地藏」と呼んでいます。英比麿の墓と回り地頭の木像は、坂部の洞雲院に祀られています。

阿久比の昔ばなし② — 於大の方 —

薫 風

天文 16 (1547) 年の初夏、ここ坂部の城外では、かぐわしい薫風がそよそよと稲田を吹き渡っておりました。

「のう、お殿様が緒川から新しい奥方様を春先にお迎えになって、もうかれこれ三月になるかのう。おかん様のこともあって、なんとなく華やかなご婚礼も冷たく感じられたが、このごろでは、お城も村も、穏やかに落ち着いて、わしらまでなごんできたわ。」

「そうよのう。これも今度の奥方様のお人がらによるのかもしれない。」

「奥方様も、聞くとところによると、おかawaiiそうなお方だそう。初めてお嫁に行かれた岡崎のお城へ竹千代様という三つにもならぬかわい子を残して帰されたばかりということだ。」

「わしら下々の者には、事の次第はようわからんが、いくさというものはむごいものよのう…。」

「ご不縁になられたが十七歳というお若さでよ、岡崎のご家来衆が大勢泣きながら送ってこられたそうだが、国境で皆帰され、村の百姓衆に興をかつがせたということだ。形原のお城を同じように離縁されたお姉上様を送ってこられた方々が刈谷で皆殺しにされなすったのとは大変な違いだと、三河では、えらい評判だそう。」

「お若いのに、情をよう心得しゃったお方よのう。…お殿様も、このごろは晴れやかなお顔にお見受けするし、前のお子、弥九郎さまはしゃぎまわっておられるということだ。」

「ほんに、うれしいことだのう。物騒な世の中で、南では戦が始まっているが、おかげでこは、よい取り入れが出来そう。」

「あ、それで思い出した。先ごろ名主さまが城内へ呼び出されて、奥方さまから棉の実をいただいてこられた。綿を作って紡げと言われてな。」

「そうかえ。それはありがたい。なかなか手に入らぬものを…。ほんにお心の深いお方じゃ。わしらも精を出さねばのう。」

面 影

於大の方は、まだ木の香の漂う一室にひっそりと座っておりました。華やかな調度に囲まれたその部屋は、数か月前の婚礼のなまめかしさを残しつつも、城主の奥方の住まいとしての落ち着きを見せ始めておりました。

夫、坂部城主久松俊勝は、打てば響くような岡崎の広忠とは違い、無口でずっしりした感じでしたが、誠実に傷心の新妻をいたわる優しい心配りを見せ、於大の方が岡崎から抱いて連れ帰った乳飲み子の姫も、この城へ引き取るよう計らってくれました。於大の方は、俊勝の広くたくましい胸がいつでも自分を強く抱き取ってくれる思いで、身も心も、城主の妻として新しく生きようとしていました。

ところが、新しい母になつき、まつわりついては全身で語りかけてくる信俊の姿に、またしても岡崎へ残してきた竹千代の面影を見てしまったのです。

兄水野信元の命に抗し切れず、去年刈谷の楞厳寺に再出発を誓ってこの城へ嫁ぎ、幸せをつかみそうに見えた彼女でしたが、それだけに、風雲急を告げる岡崎の孤児が思われ、か細い肩を落として、涙にむせぶのでした。

平和な阿久比の里は、黄金波打つ実りの秋を迎えておりました。

「お方よ。一大事となりそうじゃ。急使によれば、熱田に捕われの竹千代どのを岡崎衆が奪い返そうとする動きがあり、織田信秀どののは、いかいご立腹とのこと。竹千代どのの身にもしものことがあってはならぬ。そなたの存念を聞かせよ。」

「殿のお心に甘えて、平野久蔵どのの竹内久六どのに、熱田への心づけを届けさせていただきました。この上の重ねてのわがままにござりますが、どうか、わが身に代えての命乞いに清洲へ参ること、お許しくさいます。」

「おお、よくぞ申された。わしも同道して参ろう。急ぎ支度をいたせ。」

「はいっ…。」



再 会

「奥方様っ…。奥方様っ…。」

庭先でひそやかではあったが、せき込んで呼ぶ声に、於大の方は筆持つ手を止めました。

刈谷から持ってきた持仏の前には、ろうそくの火がかすかにゆらぎ、香の青い煙が一条、ゆるやかに立ち上がっていました。その前にしつらえた経机に向かって、於大の方は、このごろ日課としている血書の写経を進めているところでした。白磁の小皿には、小豆の汁で溶かした彼女の指からしぼった鮮血が、残り少なくなっていました。一字三礼、阿弥陀経を写しながら、薄幸の子、岡崎の竹千代と、夫俊勝のために、わが身を代えてと祈っていたのです。その写経も後少しです。

「…その声は久蔵どののか。何事ですか。」

時は、永禄 3 年 5 月 17 日の昼下がりで、坂部城は戦雲をはらんで、びいんと張りつめた空気に包まれていました。

「奥方様、殿よりの内々の御下知でござる。ただ今、岡崎の元康さまがお見えになりました。」

「ええっ、竹千代が…。」

於大の方は、思わず立ち上がっていました。

坂部城主久松俊勝に添って、於大の方はすでに三十三歳。三児二女に恵まれ、夫に後顧の憂いを与えない、立派な城主の妻となっ

ておりました。

しかし、その彼女にも、薄幸の子の面影がいつもまぶたの裏に焼きついて離れませんでした。涙の別離から、すでに十六年。熱田から駿府へ、久六・久蔵や、玄応尼となった母お富の方を通じて、さまざまな品を届けてはきたものの、長い年月、一度も会い、抱くことのなかったわが子が、戦乱の敵地であるここへしので来てくれた。涙のあふれるまぶたの裏で、ふと兄信元の顔がよぎって去りました…。

元康は、両手を畳についたまま、ただひたすら母の顔を見つめていました。駿府で世話になった祖母の顔から想像していたとおりの母の顔が目前にある。

今川義元の命令で、だれの目にも無理と考えられた大高城への兵糧の運び入れを成し遂げ、明日の総攻撃を前に、ひと目でもよい、まぶたの母に別れを告げたいと、敵味方と別れた伯父のはからいで、わずかな手兵と駆けてきた元康だったのです。

よちよち歩きに、よく転んでは泣いた、ずんぐりとした体で丸顔の竹千代が、こんなにもりりしい若武者元康となって自分の前にひかえている。

於大の方は、体を小刻みに震わせながら、

「…お子が生まれましたそうな…」

そう言うだけで、きらりと光るしずくを、膝の上で固く握りしめた手にしたたせました。

縁の薄い母子は、言葉もなく、あいさつも忘れて、ただ見つめ合うばかりでした。

時間がない。於大の方は、一心にわが子の食事を調べ、元康は、黙ってそれをかきこみ、母も黙って見つめておりました。

そのとき、別間から、むずかり泣く乳飲み子の声が聞こえました。

「母上、元康には兄弟がおりもうした。どうぞ、お子たちをこれへ。」

於大の方は、はじめてわれに帰り、笑顔でうながす元康にちらとほほえみかけて、いそいそと立ち上がります。

短い夜はすでに東の丘の陵線をかすかに染め始め、菩提寺洞雲院でつき鳴らす鐘がいんいんと暁を告げておりました。

元康は、総攻撃に臨む張りつめた心で、心おきなく城門を離れようとしていました。そして、ひっそりとたたずんで、いつまでも騎影を見送っている於大の方の傍らには、戦場では命をかけて相戦うことになるやも知れぬ俊勝のたくましい体が、そっと寄り添っておりました。



阿久比の昔ばなし

松 影

慶長7年8月28日、於大の方は、伏見城中の豪華な一室に、静かに横たわっておりました。

関が原の戦いによって名実共に天下の棟梁となり、内大臣に任ぜられたわが子家康に2月に招かれて京を訪れていた於大の方は、内大臣の生母として後陽成天皇に關し、高台院（秀吉の正室ねね）にも会い、子や孫に手をとられて京洛の見物を楽しんだのですが、7月の半ばに病臥の身となったのです。

家康はじめ、それぞれ一城の主となっている子供や甥たちの百方手を尽くしての医療看護も、朝廷の思し召しによる社寺での平癒祈願も、彼女の七十五歳の定命を延ばすことはできそうもありませんでした。

枕もとで息を詰めて見守っている人々の目をよそに、静かに瞳を閉じている於大の方の脳裏には、彼女の波乱に満ちた人生が走馬灯のようによぎります。

今川義元の討ち死に後、岡崎城を取り戻した家康は、西郡城主となった夫久松俊勝や忠誠二なき岡崎衆の決死の働きで、荒れ狂った一向一揆も甲州勢の怒濤も切り抜け、次第に頭角を現していった…。

しかし、天下を取った信長は、於大の願いをよく聞いてくれた兄水野信元を、こともあろうに、わが子家康に命じて殺させ、また、実の子として慈しみ、後事を託した久松信俊をも大阪四天王寺で切腹させた。幼い二人の孫を呑んで焼け落ちていった坂部城。

そして、あまりにも誠実なるが故に、信長と家康の仕打ちを怒り、長い流浪の末に憤死した夫の俊勝…。ただちに黒髪を切って、伝通院と号し、愛する夫や亡き人々の冥福を祈ろうとしたわが身…。

その後、幾度かの死地を切り抜けていく家康に乞われ、岡崎・浜松・駿府と、生母として居を移して行ったのだが、その家康も今では、天下の大御所としての貫禄を備えてきている。

もう、私の手の届かぬ存在となった。

坂部城で生んだ元康は因幡守、定勝は隠岐守に、甥の水野勝茂は日向守と、皆一国一城の主ばかり。

もう、私は用のない身となった。

思えば、十五年の短い歳月ではあったが、傷心の身を夫の翼に抱かれ、多くの幼な子に囲まれながら、必死になって岡崎に残した子を思い、仕送りを続け、血書までしてきた、あのころが、あの阿久比の里が、私にとっては、いちばんなつかしい…。

物音一つしない病室の明かり障子に、細長く尾を引いていた庭の松の枝影が、ひそと揺れたとき、於大の方は深々と沈んで行く意識の中で、思い出深い坂部城の一室に、夫俊勝に寄り添い、幼な子をあやしつつ、若武者竹千代と談笑している自分の姿を見て、にことほほえんでおりました。



阿久比の昔ばなし③ — 福住の豊田佐吉 —

織機開きの日

「弥吉さん、あんた聞かれたかや、田村とこに入った機械のこと。すごいのが四十台も入ったんだって。」
「ふうん、そいで、どこの機械だか分かったのか。」
「それがよう分からん。工場の窓には幕が張ってあるし…。だけど、乙川の石川工場のよりすごいんだそうだ。」
「ほお、そいじゃ、きっとドイツ製だ。機械はやっぱりドイツだと言うもんな。」

明治45年のことでした。福住荒古の田村衛治郎さんが織機を全部、最新の力織機に入れ替えたという話は阿久比中の大評判となりました。

豊田佐吉との約束で、田村さんがあれほど秘密にしておいたのに、どこでどう聞きつけたのか、織機開きの日には、宮津や植だけではなく、草木や岡田からも大勢の見物人がおしかけて来ました。

「なあ、弥吉どん。こういう時は宮津では花火をあげるんじゃないかな。」

「そうだよ。旦那衆の所をチョチョと回ってくれば、十発や二十発は、ポンポンだ。荒古じゃ…。」

弥吉と呼ばれた人が、そこまで言った時でした。突然、工場の中でダダダと大きな音がし、それまで人々の視線をさえぎっていた暗幕が取り払われ、ガラス戸まで開け放されました。中には緊張した面持ちの田村さんが立っていました。おそらく、今日のための舶来品なのでしょう。足にぴったしくつついたグレーのパンタロンは、瘦身の田村さんを一層スマートに見せていました。

田村さんが一台一台織機に触れていくと、「シャシャシャ」と規則正しく軽快な織機の合唱が始まりました。

ところがです。しばらくして、パタパタと織機が止まり始めました。田村さんが、最初の織機を再び動かした時には、三台も四台も止まっていました。二台目を動かした時には、半数近くの織機が止まっていました。

それから田村さんの奮闘が始まりました。あちらをかまえばこちらが止まり、こちらを直せば向こうが止まる。次々に止まってしまう織機の間を走り回る田村さんのパンタロンが、次第に黒く、また黒く油で汚れていき、見物の人も一人、一人、また一人消えていきました。

田村さんが、奥さんの弟、草木の清さんをこっそり使いに出したのは、「やっぱり、日本製はだめだ。」と言って、植の鍛冶屋の広さんが立ち去った後の、次の日のお昼近くになってからでした。

汗だく佐吉

次の日の朝、清さんから事情を聞いて、亀崎まで武豊線を使い、福住荒古にやってきた豊田佐吉の姿は、尻ばしりに股引きをはき、鳥打ちをかむった、どこから見ても商店の御用ききの姿でした。

「ちっとも、動きゃへんが。」

佐吉の顔を見た田村さんは、思わずむき出しの阿久比弁で叫んでいました。

「どれもこれも、すぐ止まってしまうんです。一人で二十台はいい、女でもかまえるはずだと言われたのに、どうなっているんです、このハタゴは…。」

汗をふきふき、一々うなずきながら聞いていた佐吉の目が「ハタゴ」という言葉が出た時、厚めの目ぶたの奥でキラリと光りました。

真剣な顔つきになった佐吉は、黙って、つうつと工場に入っていました。佐吉は、まだ機に掛かっている綿布を一枚一枚天眼鏡で覗き込み、それが終わると、今度は、一台一台隅から隅まで織機を調べていきました。

どこをどうかまったのか、不思議が起きました。佐吉に糸をつながれ、シャトルを整えられた織機は、まるで生き返ったように動き始めました。どの織機も、どの織機も、止まることを忘れたように動き続けました。時たま止まる織機は必ず縦糸が切れていました。

調子づいてしまった織機は、田村さんがやっても、佐吉にせつかれての奥さんのサクノさんの手にかかっても同じでした。二日目も、三日目も動き続けました。四日目になって、「止まるところがいいのだ」ということが、田村さんにもやっと分かりました。

しかし、一日、一日と、佐吉の目が厳しくなっていました。

五日目から、佐吉の夜なべが始まり、九日目には、清さんが、高瀬技師を呼びに、また名古屋まで走らされました。十五日目には、腕を見込まれ、植の鍛冶屋の広さんが呼ばれてきました。

豊田佐吉が福住荒古をやっと出発できるようになったのは、二十一日目の朝のことでした。佐吉は、来た時とは大違いの一分の隙もない洋服姿で、ステッキまで持っていました。

佐吉は、糸が切れるようになったら植の広さんと呼ぶこと、三、四日は小鈴谷の退三さんの家にいることを告げた後、サクノさんに「一、二、三の四ですよ。」と言って、ハンドルを引く仕草を示し、人力車に乗り込みました。

遠ざかって行く人力車を、田村さんは、「ふうん」とうなりながら、サクノさんは「ググッ」とくる始動の際のハンドルの感じを思い出しながら見送っていました。

